

令和8年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

豊かにかかわり つながり 「わたし」を広げる造形活動

2 研究主題設定にあたって

造形活動では、児童が目を輝かせながら、心に思い描くイメージの実現に向けて夢中で取り組む姿が見られる。その過程で児童は、「これでいいのか」「もっとこうしたい」といった自己内対話を重ね、自らの表現を見つめ直し、形や色、素材の違いなどによる多様な表現の面白さや楽しさに触れていく。

図画工作科は、このような活動を通して、児童が自由に想像を広げ、「つくり、つくりかえ、つくる」中で自分らしい表現を生み出していく教科である。また、表現と鑑賞の協働的な学びは、児童の造形的な見方・考え方を深化させ、個々の創意工夫が輝く学びを実現する。生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる資質・能力の育成は、VUCA の時代において、主体的に社会に参画する基盤として不可欠なものである。

このような観点から、図画工作部会では、すべての児童が主体的・対話的で深い学びの中で自分らしい表現を生み出せるように実践を積み重ねてきた。特に、「表現内容(何を)」「表現材料(何で)」「表現方法(どのように)」「(以下、「3つの要素」とする)と豊かにかかわりながら、「ひと」、「もの」、「こと」とつながり、協働的な学びの場を通して表現しようとするものを「つくり、つくりかえ、つくる」ことができるように進めてきた。

鑑賞活動においては、自他の表現のよさや美しさに気付き、造形的な見方や考え方を広げ、深められるような指導を目指して工夫を重ねてきた。そして、表現と鑑賞を相互に関連させることで、新たな表現につながる学習過程の工夫についても検討してきた。

その結果、児童は題材と向き合いながら、どのようなものを、どのような材料で、どのようにして表現しようかと考え、自己決定するようになってきた。また、友達の活動や作品を鑑賞する機会や、友達と対話する機会が多く設けられたことで、よりよいものを表現しようとする意欲的に活動に取り組むようになった。

このように、自らよりよい生活を創造する資質・能力を身に付けた児童の姿を実現するためには、教師の働きかけや支援は欠かせない。教師は学年間や他校種間での活動内容を系統立てて理解した上で、声かけや支援を行うことが重要である。これらの内容やタイミングが適切になれば、児童はこれまで以上に生き生きと夢中で造形活動に取り組むようになると思われる。

以上のように、3つの要素と豊かにかかわり、「ひと」、「もの」、「こと」とつながりながら、自分に必要なものやことを自ら選択・決定し、新たな自分らしい表現を生み出していくことができるよう、「わたし」を広げる積極的な教師の働きかけや支援を重視した指導の充実を目指し、本研究主題を設定した。

3 研究主題についての考え方

「豊かにかかわり つながり」とは、3つの要素と豊かにかかわりながら、「ひと」、「もの」、「こと」とつながりをもつことを示している。

この3つの要素と豊かにかかわる表現活動では、製作過程や鑑賞時の視点や置き場所を変えることで、見え方・感じ方が変わり、未知の発見や気付き、ひらめきが生まれ、今までにない新しい表現が生まれることがある。また、のこぎりで木材を切る時の手に伝わる手応えや木材の匂い、絵筆で広い面を塗る際の絵の具が伸びていく感覚などを意識させることで、より豊かなかかわりが期待できる。児童がそれらをしっかりとつかんだ上で、3つの要素のそれぞれと豊かにかかわることができるように、指導のねらいを明確にして授業を行うことが重要である。また、3つの要素を意識的に関連付け、主体的・対話的で深い学びのある表現活動と鑑賞活動に取り組めるようにすることが求められる。さらに、表現及び鑑賞に関する資質・

能力を相互に関連付けながら、造形的な見方・考え方を高めていくことも必要になってくる。その際、〔共通事項〕の視点を踏まえた授業づくりをすることで、より豊かなかかわりのある活動にすることができる。

「ひと」とのつながりでは、友達と作品を見せ合って感じたことや考えたことを伝え合う機会をつくることで、協働的な学びを促し、新たな表現方法を思い付く児童の育成を目指す。また、そのようなかかわりを通して「つくり、つくりかえ、つくる」ことを楽しむことができる児童を育てていく。そして、教師や地域の方、美術館の学芸員などによる支援や助言を通して、活動の中で生まれる様々な気付きや発想をよりよい表現につなげていく。さらに、友達の気付きや発想に共鳴しながら、多様な表現ができるように促すとともに、自分の感覚や行為を振り返り、友達や教師との対話を通して造形的な視点への理解を深める。そのうえで、つくり出したいイメージに近づけるためのよりよい方法を自ら見いだす力を育成していく。加えて、多様な他者の見方・考え方に触れ、協働的な学びや対話的で深い学びの充実を図ることで、新たな表現を生み出す能力も育んでいく。

「もの」とのつながりでは、身の回りの材料や道具の中から自分がつくりたいものに最適だと考えられるものを取捨選択し、自己決定できる能力を育成していく。また、自分に必要だと考えたものを活用し、つくり出したいイメージに近づけるために「つくり、つくりかえ、つくる」中で、児童一人一人の「やってみたい」を大切に工夫や発見のある学びをつくっていく。さらに、場所に働きかけるような活動も実施し、徐々に表れてくる全体の雰囲気の変化に気付き、次の新たな活動を思い付く力も育んでいく。こうした学びを通して、児童は主体的に造形活動に取り組むようになり、夢中で目を輝かせながら新たな発想を生み出していくようになる。

「こと」とのつながりでは、身近な自然や現象、行事や他教科と関連付けて題材を設定することで、生活や社会の中の形や色などとのつながりをより一層深めていく。また、表現している過程で感じたことや気付いたことを次の活動に生かしていくことで、自分だけの新たな表現を生み出す面白さに気付かせたい。さらに、自然や現象、出来事や場所などへの働きかけや、そこで感じたこと・思い付いたことを表現に生かす授業展開をすることで、豊かな情操の育成にもつなげていく。

『わたし』を広げる造形活動とは、児童が3つの要素と豊かにかかわり、身の回りの「ひと」、「もの」、「こと」と主体的・対話的につながりながら活動する中で、自分の思いを基につくったり、みたりする喜びを感じ、感性を育み、楽しく豊かに生活を創造していくことを指している。そして、そのような学びの積み重ねを通して、児童が自分の表現・感じ方・考え方を、他者や材料、出来事との出会いの中で更新し、新たな「わたし」を広げていくことを意味している。この際、教師は授業の指導者でありながら、時にアドバイザーとして、時にファシリテーターとして児童に寄り添い、適切な声かけや支援を行うことが求められる。

4 研究内容

(1) 学年間や異校種間の系統性、児童の発達段階を意識した指導計画の工夫

目指す児童を育成するためには、学年間はもちろん、就学前教育や中学校教育を見据えた系統性のある指導計画を作成することが重要である。また、児童の発達段階を踏まえた指導を行うことも欠かせない。これらを実現することは、児童の「できた」が増えていく学びや、自分らしい伸び伸びとした学びを実現する授業づくりにおいて必要不可欠だと考える。そこで、第32回四国造形教育研究大会徳島大会で作成した「幼稚園・小学校・中学校・高等学校の造形教育における系統性を踏まえた学習内容の一覧」を効果的に活用していく。また、児童の実態把握に努め、「わたし」に寄り添う働きかけや支援を行うことで、児童の思いや願いに応じた適切なかかわりがこれまで以上に可能となり、主体的・対話的で深い学びのある活動がより一層展開されると期待できる。

指導計画を作成する際には、「A表現」と「B鑑賞」をバランスよく配置し、創意工夫を図ることが求められる。各内容を十分に関連させ、「造形遊び」「絵や立体、工作に表す活動」「鑑賞」が偏りなく配置されることで、多様な活動を基にした自分らしい表現の機会を計画的に保障していく。

(2) 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る授業改善

多様な他者の造形的な見方や考え方を各々の学びに生かすためには、どのように指導を行うかを検討し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図っていく必要がある。例えば、表現で活用が期待できる魅力ある多様な材料を紹介したり、児童自身に材料を集めてくるよう働きか

けたりして、児童が自分のイメージに最適だと考えられる材料を取捨選択できる機会を増やす。そうすることで、児童は試行を重ねながら、自分に合った表現方法を見つけ出そうとするようになる(個別最適な学び)。この活動の際には、友達の方法や表現している様子、教師が準備した多様な材料などが自然と目に入ってくるように席や机の配置を工夫する。このような環境づくりは、選んだ材料によって自分とは異なるすてきな表現が生まれることに、児童自らが気付くきっかけを与えることになる。このような気づきを通して、他者の表現のよさや美しさを感じ取り、これまでの自分にはなかった見方や考え方が広がり深まっていく(協働的な学び)。このような経験が、新たな材料の使い方や組み合わせの発想につながり、自分らしい新たな表現を生み出すことへと結び付いていく(個別最適な学び)。

また、個別最適な学びと協働的な学びを意識的につなげていくための手立てとして、ICT 機器の積極的な利活用がある。例えば、児童一人一人が必要なタイミングで情報検索や教科書の2次元コードから資料を読み取ることができれば、表現を行う中での戸惑いや行き詰まりを軽減することにつながったり、自分の表現を見つめ直すきっかけになったりすると考えられる(個別最適な学び)。また、学習支援アプリを活用すれば、短時間で児童一人一人が獲得した学びを共有することも可能になる(協働的な学び)。

以上のように、3つの要素と児童が豊かにかかわり、「ひと」、「もの」、「こと」とのつながりを大切にしながら、自分らしい表現を生み出すことができるようにする。そして、自分とは異なる友達の表現方法に触れ、そのよさや美しさを共有し合う中で、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、すべての児童が新たな表現を生み出す喜びを感じ、輝ける授業を実現していく。

(3) 指導と評価の一体化の工夫

指導のねらい(育成を目指す資質・能力)を明確にし、児童の実態と発達段階に沿った目標を設定した上で、授業を実施し評価を行う。そして、この評価をその後の指導改善につなげていく。この際、活動の終末(作品等)の評価だけに偏らないよう留意する。活動の過程においては、児童が見せるつぶやきや行為など、学習状況の的確な見取りを行い評価していくことが重要である。目標の達成が不十分な場合には、指導方法の見直しを行い授業改善に努める。また、自分なりの表現ができていない児童についても、「幼稚園・小学校・中学校・高等学校の造形教育における系統性を踏まえた学習内容の一覧」を活用しながら、一人一人に応じた適切な声かけや支援を検討し、指導に生かしていく。こうした取組を通して、すべての児童がよりよい表現へと向かっていけるよう授業改善を図る。

このようにして指導と評価を一体化させることで、児童の実態や思いに寄り添う指導が可能になると考えられる。また、児童自らが学びを振り返り、自分の表現をよりよくしていくことができるよう、自己評価や相互評価の方法についても工夫し実践していく。その際、ICT 機器を効果的かつ積極的に利活用する。活動の過程を映像で記録しておくことで、後に自身の活動を振り返り、細部の工夫に気付くことができる。これは、従来の記録方法や話し合いでは見落とされがちだった、児童一人一人の表現のよさを認め、「わたし」の心をより豊かにすることにつながる。また、動画を記録することで、児童がよい表現を思い付く瞬間を振り返ることができ、その気づきを次の活動の新たな表現へとつなげていくことができる。こうした取組により、指導と評価の一体化をさらに活性化させていく。

5 研究方法

- (1) 本年度は研究大会会場校である、那賀町立相生小学校を中心とした研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。
- (2) 各郡市研究会は、次頁の研究主題の解明に向けて共通理解を図り、研究や授業実践を行う。

造形遊びをする活動部会	<p>○ 造形遊びをする活動を通して、活動を工夫してつくることができるようにするためにどうすればよいか。 「知識及び技能」</p> <p>○ 造形遊びをする活動を通して、造形的な活動を思い付くことや活動の仕方について考えることができるようにするためにどうすればよいか。 「思考力・判断力・表現力等」</p>
絵や立体、工作に表す活動部会	<p>○ 絵や立体、工作に表す活動を通して、表し方を工夫することができるようにするにはどうすればよいか。 「知識及び技能」</p> <p>○ 絵や立体、工作に表す活動を通して、表したいことを見付けることや、表し方について考えることができるようにするにはどうすればよいか。 「思考力・判断力・表現力等」</p>
鑑賞活動部会	<p>○ 鑑賞の活動を通して、造形的な魅力や造形的な表現の内容、方法、意図や特徴、表し方の変化などについて感じ取ったり考えたりし自分の見方や感じ方を広げたり深めたりするにはどうすればよいか。 「知識」「思考力・判断力・表現力等」</p>

※上記に加えて、〔共通事項〕(1)は、すべての部会に関連付ける。

(引用・参考文献)

文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 図画工作編」平成29年

文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 総則編」平成29年

文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 令和2年3月

文部科学省「小学校図画工作科の指導におけるICTの活用について」 令和2年6月

中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申) 令和3年1月